
ケアする対話

この世界を自由にする
ポリフォニック・ダイアローグ

横道 誠, 斎藤 環, 小川公代,
頭木弘樹, 村上靖彦著

金剛出版, 四六判 230 頁, 2,750 円, 2024 年 3 月刊

(たかぎクリニック) 高木俊介

対話から生まれるケアのはじまり

〈病院の世紀〉が終わり、〈地域〉の時代がやってくる。その時、これまで病院の中で管理のために積み上げられてきた数々の精神科治療や心理療法、それらを支えてきた精神病理の知見などは、管理の道具としての暗さ堅苦しさを取り払われ、その使い手たちであった精神科医や看護師、カウンセラーら専門家の厳めしい顔つきからひき剥がされて、街中のオフィス街での寄り集まりや野原のピクニックに気軽に携える、曲げわっぱのような楽しいお弁当箱になっていくだろう。

オープンダイアローグや当事者研究は、今、そん

なふうにして、街中の小さな施設や当事者たちの集まりの間に広がりつつあるように見える。もちろんそれは、まだじつと目をこらし耳を澄まさないと感じつかない、一つひとつは小さく、そして確かに一瞬のシャボン玉のように消えてしまうことも多いものかもしれない。それでも、次々と輪っかが連なるように、薺（アサガオ）の花が開いていくように、生まれている（「輪っか」と「薺（アサガオ）」は横道の小説に出てくる架空の当事者会）。実に、精神科治療と称するもののほとんどに期待しては裏切られ続けてきた当事者たちの切ない思いに、ダイアローグは今度こそ自分たちのものにできるかもしれない希望となっている。

その時代の最先端の流れに棹さしながら切り拓いているのが当事者の一人である横道誠であり、専門家として彼の活動を応援する斎藤環である。当事者研究とオープンダイアローグを実践して積み上げた経験から、「唯（ゆい）」という少し破天荒で魅力的な ASD 女性を主人公に小説『唯が行く！』（金剛出版、2022）を書いた横道が、彼のめざす方向に「当事者批評」という評価を与えた斎藤と、仲間の文学者、学者を集めて自分の実践を俯瞰的に眺め返すという試みが本書である。そこでは誰もが当事者たrazるを得ない今の、そしてこれからますますそうなると思われる社会で、互いのケアを対話によって育てていくことが重要であることがさまざまな角度から語られる。専門家が一方的に与えるのではない、対話によって生まれるケア、対話そのものがケアとなるつながり。これまでどうしても乗り越えることができなかった、あるいは乗り越えることなど考えられもしなかった、専門家と当事者の間のヒエラルキーを、本書の対話者たちは〈多孔性〉〈明け透き〉〈歎待性〉などそれぞれの手持ちの概念を重ね合うことで、双方向から乗り越える道を探っている。

それぞれの分野での「専門家」が集まったことで、やや概念化を急ぎすぎ、生硬な前のめり姿勢を否めないが、新しい分野の創生期にはありがちなことだ。それでも前著『唯が行く！』に笑わされながら併読すれば、読者はおそらく全国各地に芽生えつつある当事者同士の対話という新たな胎動に思いを馳せることができるだろう。